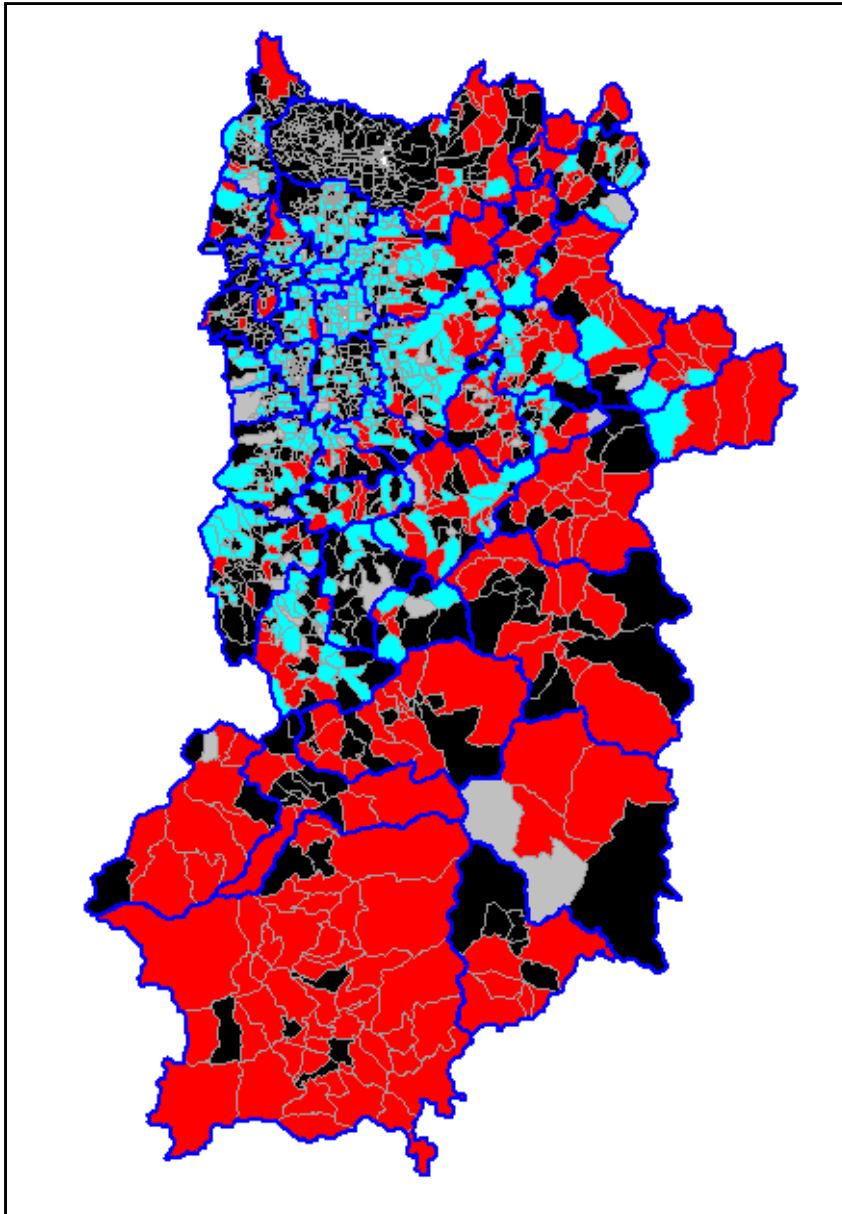


農業・林業集落アンケート調査によるサルの生息状況・被害状況(平成23年度)

1. 農業・林業集落アンケート調査によるサルの分布(平成23年度)



右図は、平成23年度の農業・林業集落アンケート調査による、サルの分布である。

農業集落、林業集落のいずれかでサルが「いる」と回答があった場合に「分布している」とした。回収無しには既に人が住んでいない集落も含まれている。

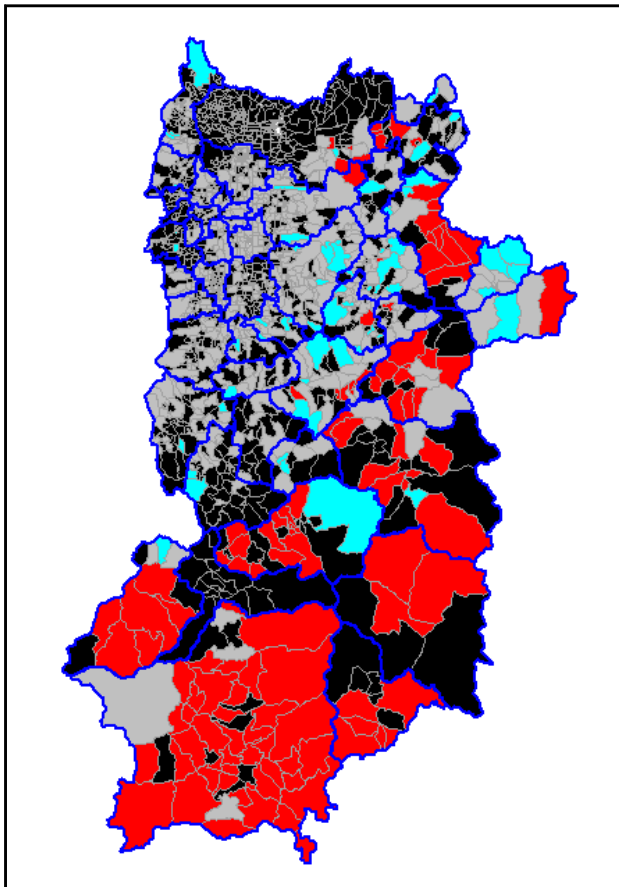
サルが「いる」との回答は、県内の広範囲から得られた。ただし、これらの回答には、オス個体が他の群れに移動する途中の、いわゆる「離れザル」が出没した場合も、サルがいると回答しているものもあると考えられる。したがって、現実的なサルの分布は、後述する群れの有無についての設問によるべきである。

回答凡例

■ いる	300集落
■ いない	420集落
■ 回答無し	62集落
■ 回収無し	1026集落
計	1808集落

凡例 図中 青線 旧市町村界 市町村界内側の線 大字・地区界
 なお、この市町村界、大字・地区界の凡例は次項以降の図も同様である

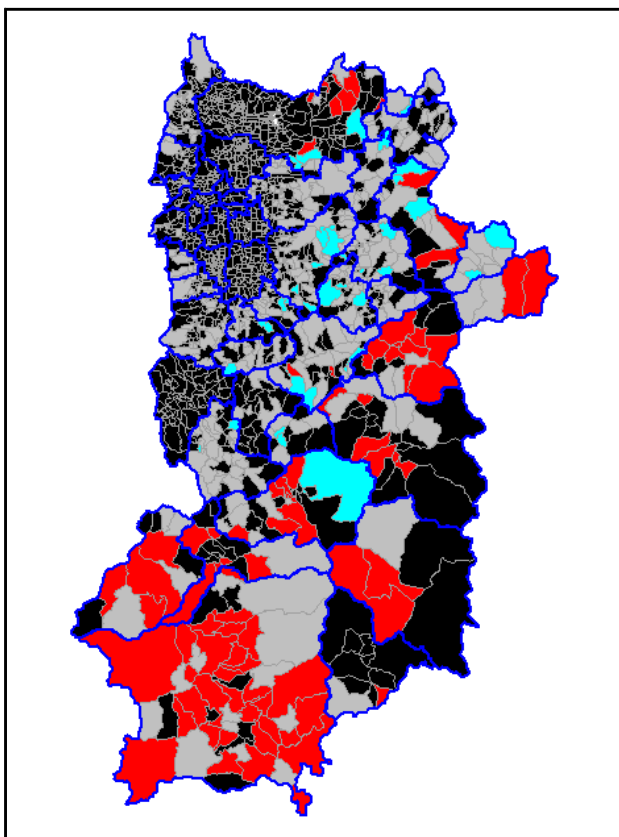
2. 農地・集落周辺におけるサルの群れの有無(平成23年度)



右図は平成23年度の農業集落アンケートによる、サルの群れの農地・集落周辺における有無である。県北部・県北東部から県東部・県南部の吉野郡にかけて、群れが存在すると回答があった。一方で県北西部、県西部からは群れが存在するのと回答は無かった。

■ 群れ有
■ 群れ無

3. 山林・奥地森林におけるサルの群れの有無(平成23年度)



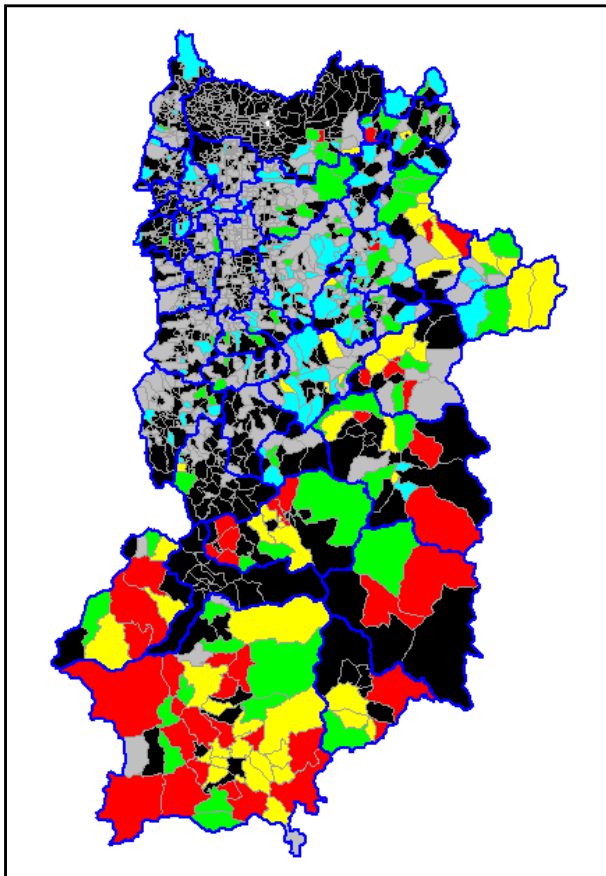
右図は平成23年度の林業集落アンケートによる、サルの群れの山林・奥地森林における有無である。農地・集落周辺における群れの有無とほぼ同じ地域から、群れが存在すると回答があった。

■ 群れ有
■ 群れ無

農業アンケート及び林業アンケートより、県北部の奈良市柳生周辺、県北東部の宇陀市、宇陀郡周辺から県南部地域の吉野郡にサルの群れが存在すると考えられる。そして、その他の地域では、「離れザル」が出没しているものと考えられる。

なお、県内に群れが何群存在するかはアンケート調査だけでは把握できない。現地調査を実施しなければ、正確な回答は得られない。

4. サルの農業被害の大きさ(平成23年度)



右図は平成23年度における農業集落アンケートによる、農業被害の大きさの意識調査の結果である。

サルが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった284集落の内訳は下記の通りである。

被害が「深刻」との回答は約15%、被害が「大きい」との回答は約18%となっていた。

被害が「大きい」、又は「深刻」と回答があった地域は、サルの群れが存在すると回答のあった地域と大凡一致していた。群れから離れたサルが単独で加害する場合は、被害は大きくならないが、サルが群れで農地に現れた場合、各農作物の被害が大きくなると考えられる。

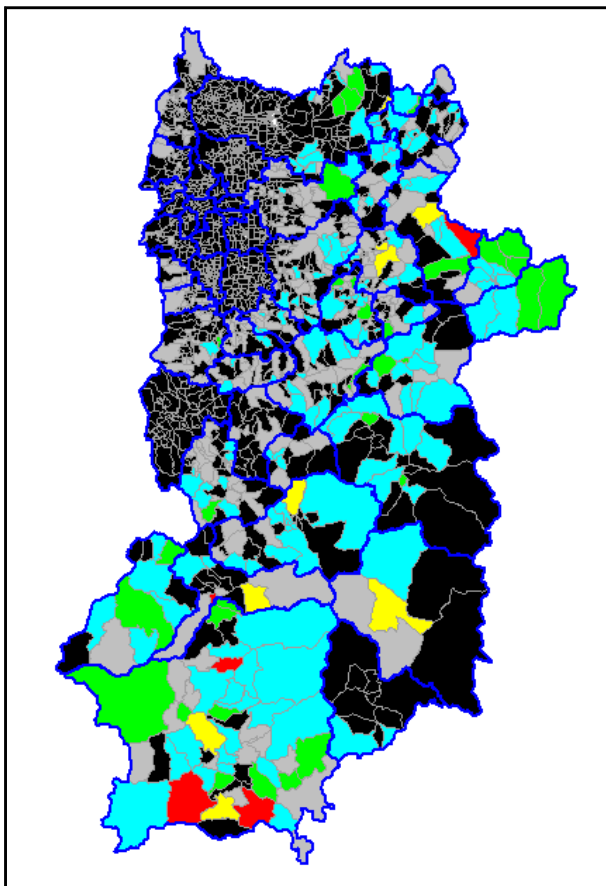
・平成23年度

ほとんど無い	114集落 (40.1%)
軽微	78集落 (27.5%)
大きい(生産量の30%未満)	50集落 (17.6%)
深刻(生産量の30%以上)	42集落 (14.8%)
回答数	284集落

・参考)平成22年度

ほとんど無い	112集落 (38.1%)
軽微	90集落 (30.6%)
大きい(生産量の30%未満)	55集落 (18.7%)
深刻(生産量の30%以上)	37集落 (12.6%)
回答数	294集落

5. サルの林業被害の大きさ(平成23年度)



右図は平成23年度における林業集落アンケートによる、林業被害の大きさの意識調査の結果である。

サルが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった198集落の内訳は下記の通りである。

回答は、「ほとんど無い」が約76%を占めており、「大きい」又は「深刻」は併せて約7%であった。サルによる林業被害については、別途、被害形態を問うたが、具体的にスギ・ヒノキ、ケヤキ等の造林木の被害の回答は8集落からのみであった。その他はカキ、クリ等の果樹の被害が3集落から報告があった。サルによる林業被害は少なく、局所的に生じるものと考えられる。

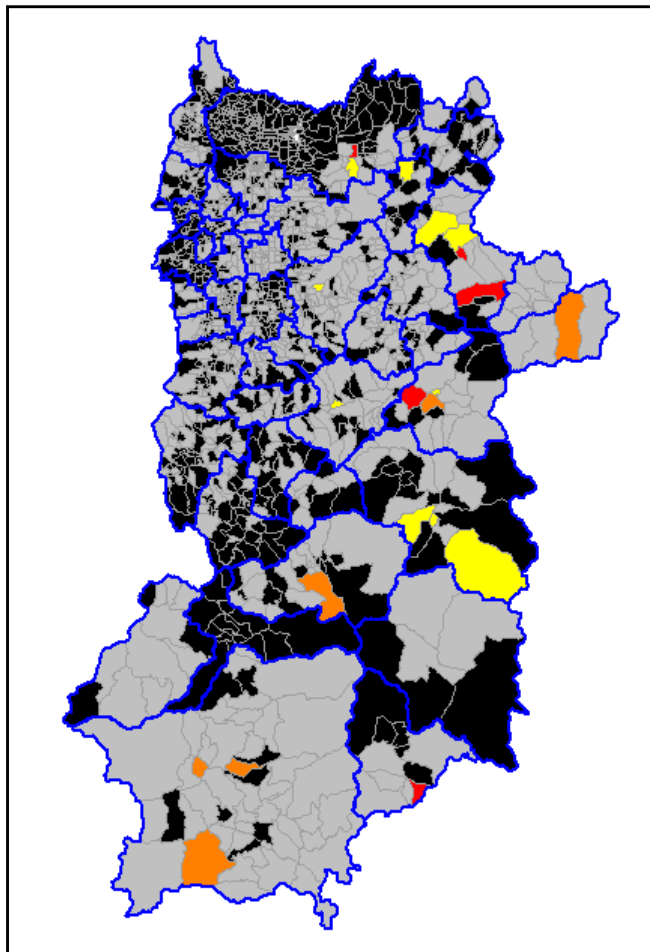
・平成23年度

ほとんど無い	150集落 (75.8%)
軽微	34集落 (17.2%)
大きい(生産量の30%未満)	9集落 (4.5%)
深刻(生産量の30%未満)	5集落 (2.5%)
回答数	198集落

・参考)平成22年度

ほとんど無い	165集落 (73.7%)
軽微	39集落 (17.4%)
大きい(生産量の30%未満)	15集落 (6.7%)
深刻(生産量の30%未満)	5集落 (2.2%)
回答数	224集落

6. サルの農地・集落周辺での人的被害



右図は平成23度における農業集落アンケートによる、サルの農地・集落周辺での人的被害の調査結果である。

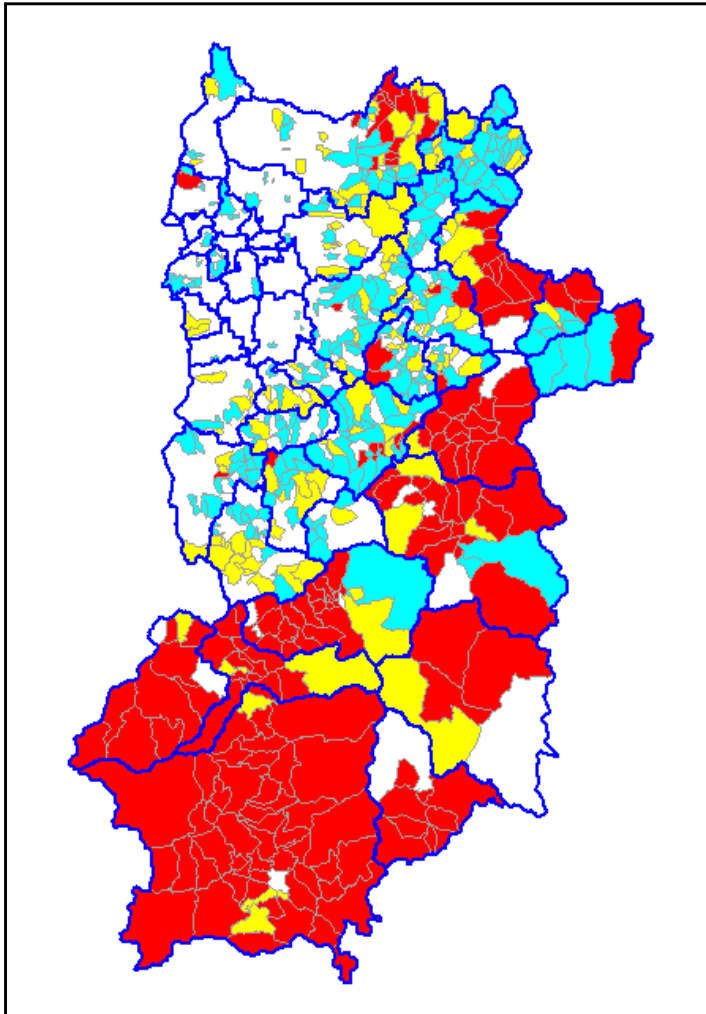
ここでいう人的被害とは、サルの住居への侵入や器物を損傷すること、人への威嚇行為や噛みつくなどの襲う行為である。

人的被害は、21集落から回答があった。その内訳を下記の通りである。

人的被害は、サルの群れが存在する、県北部から県東部・県南部で発生していた。

住居侵入や器物破損	10集落
人を威嚇・襲う	6集落
上記の両方	5集落
回答数	21集落

7. サルの農地・集落周辺への出没動向(平成19～24年度の5年間)



右図は、サルの農地・集落周辺への出没の5年間の動向である。

毎年集落毎に農地・集落周辺へのサルの出没を1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの区分で回答を得ている。そして、「よく見る」を+1、「たまに見る」を±0、「あまり見ない」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計した。合計が、+1以上の場合(つまり、よく見るが多い場合)は赤色で、0になる場合(つまり、たまに見るが多い場合)は黄色で、-1以下になる場合(あまり見ないが多い場合)は青色で各集落を色分けした。合計は、5年間で1度でも回答があった場合を集計した。空白は調査した5年間、サルがいない、無回答、もしくは集落に人が住んでいないのいずれかである。

サルの農地・集落周辺への出没動向は、前年度までと同様に、前述設問でサルの群れが存在すると回答があった地域で、多い傾向にある。

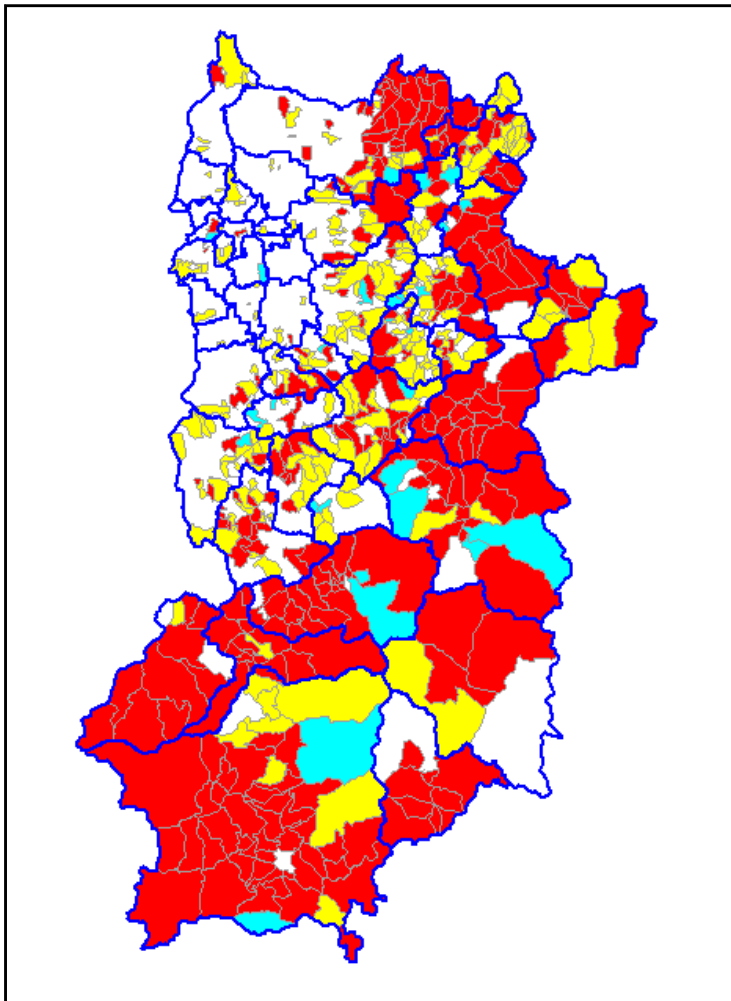
平成23年度までの5年間

よく見る	173集落(31.7%)
たまに見る	133集落(24.4%)
あまり見ない	239集落(43.9%)
回答数	545集落

参考)平成22年度までの4年間

よく見る	166集落(33.2%)
たまに見る	141集落(28.2%)
あまり見ない	193集落(38.6%)
回答数	500集落

8. サルの農業被害意識の動向(平成19～23年度の5年間)



右図は、サルによる農業被害の増減意識の5年間の動向である。

毎年集落毎に農業被害が前年度より1. 増えた、2. 変わらない、3. 減ったの区分で回答を得ている。そして、「増えた」を+1、「変わらない」を±0、「減った」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計した。5年間の合計が+1以上の場合(つまり、増えているが多い場合)は赤色で、0になる場合(つまり、変わらないが多い場合)は黄色で、-1以下の場合(つまり、減ったが多い場合)は青色で各集落を色分けした。合計は、5年間で1度でも回答があった場合を集計した。空白は調査した5年間、サルがいない、回答がない、集落に人が住んでいないのいずれかである。

サルによる農業被害の意識は、ごく一部の地域では減ったとなっているが、県全体では増加傾向にあり、全回答の約53%が増えたとなっていた。また、群れが存在しない地域でも増えたと回答しているが、これらの地域の被害の大きさは、「ほとんど無い」か「軽微」である。群れから離れたザルが被害を発生させることがあると考えられる。

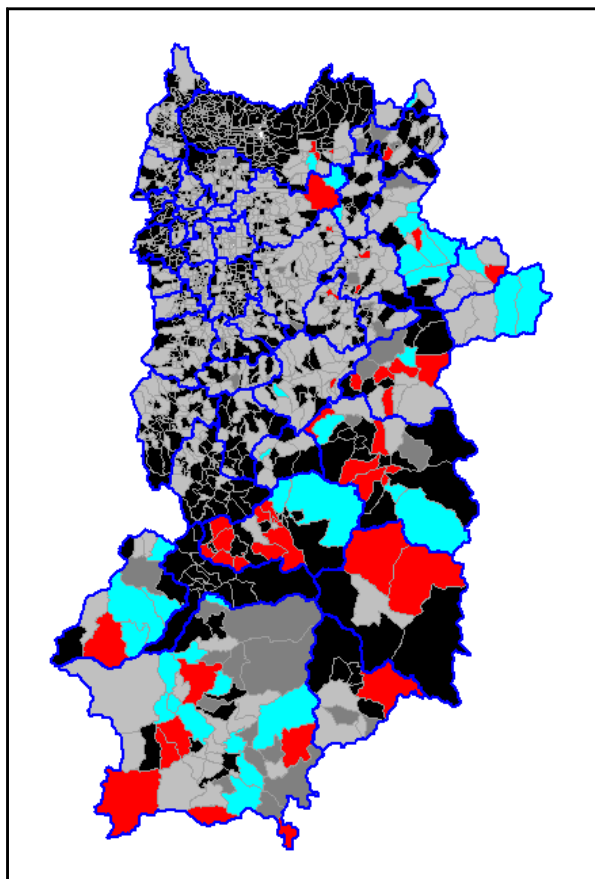
・平成23年度までの5年間

■ 増えた	289集落 (53.2%)
■ 変わらない	227集落 (41.8%)
■ 減った	27集落 (5.0%)
回答数	543集落

参考)平成22年度までの4年間

■ 増えた	272集落 (55.7%)
■ 変わらない	197集落 (40.4%)
■ 減った	19集落 (3.9%)
回答数	488集落

図 サルの被害対策 侵入防止柵の効果(農地・平成23年度)



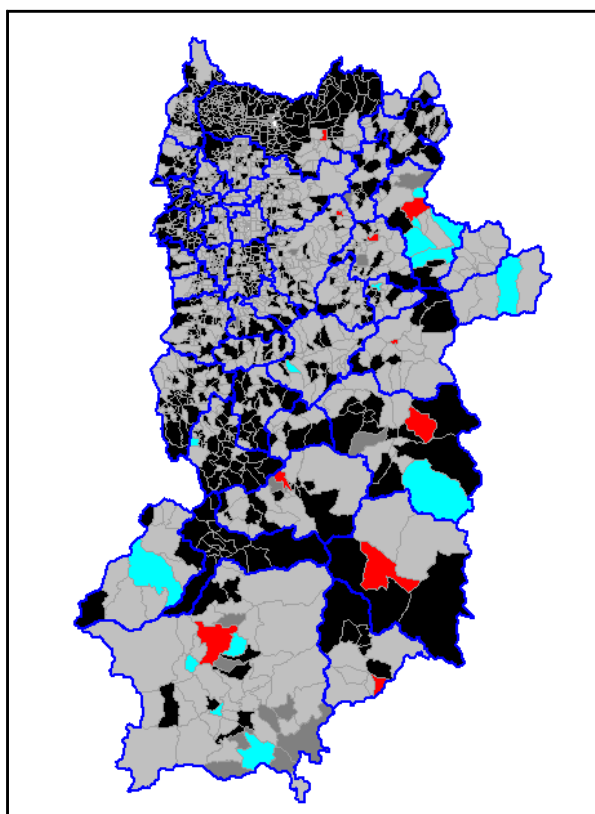
右図は平成23年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、イノシシ侵入防止柵(防護柵)の効果の意識調査の結果である。

効果の有無の回答のうち、約半数強が効果があったしており、侵入防止柵を設置することにより一定の被害防止効果があることがわかる。

しかし、侵入防止柵の種類や設置方法によっては、被害防止効果が発揮されないことがあるため、農業総合センターが開発した侵入防止柵の「猿落君」等の積極的な使用、設置方法の改善等の普及が必要と思われる。なお、猿落君はサルのみでなく、シカ、イノシシにも対応したものである。

・平成23年度	
■効果があった	43集落
■効果が無かった	37集落
回答数	80集落
・参考)平成22年度	
■効果があった	50集落
■効果が無かった	35集落
回答数	85集落

図 サルの被害対策 有害捕獲の効果(農地・平成23年度)



右図は平成23年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、有害捕獲を実施した効果の意識調査の結果である。

有害捕獲の効果があったという回答は、40%にとどまった。前年度よりも低くなっていた。

・平成23年度	
■効果があった	10集落
■効果が無かった	15集落
・参考)平成22年度	
■効果があった	16集落
■効果が無かった	13集落

サルは学習能力が高いため、捕獲の難易度があがることがある。猿落君等の侵入防止柵の設置を含めて、総合的な被害対策である、地域ぐるみの鳥獣害に強い集落づくりを、各地域へ普及していくことが非常に重要である。